



第3回 自律と共生

7月に入ったらドイツにも猛暑がやってきた。連日35度を超える暑さが続く。湿気がないとはいえ、じりじり照りつける直射日光にからだは焼けるような耐え難さを感じる。ドイツ社会では一般的に冷房設備が普及していないので、こうなると逃げる場所がなくなる。家にいても、大学にいても暑さをひたすら我慢するだけになってしまう。とくに悲惨なのは交通機関だ。密閉型のICE（新幹線）には冷房があるのだが、ドイツ人が冷房や風を嫌う傾向があるためあまりきかない。列車やバス、トラムなどの一般車両にはやはり冷房はついていない。一週間ほど前にはICEの冷房が故障して車内温度が50度近くになり熱中症患者が続出するという事態も起きている。明らかに異常気象なのだが、最近のヨーロッパでは異常気象が常態化している感じもする。簡単に地球温暖化と結びつけるのは危険だし軽率だと思うが、気になるところではある。

さて前回サッカーと野球の比較を行い、そこから見えてくる「社会」の違いについて考えてみた。今回はさらに問題をもう少し普遍化して考えてみたいと思う。

わたしたちがホスピタリティ問題に取り組んだのは、社会を「自律と共生」の原理を通して根本的に組み替える必要があるという問題意識からだった。その前提となっていたのは、今わたしたちの社会が崩壊の危機にたたされているのではないかという危惧である。

先の見えない閉塞間や不安感の蔓延、失業や不適應等の理由から社会のなかに居場所を見つけられなくなってゆく人々の激増、その結果としての自殺者や精神疾患の増大、さらには社会内部での連帯や共感の意識の低下、理不尽な暴力の噴出などが、わたしたちの存在を、そしてそれを本来支えはぐくむ基盤であり場であるはずの社会を脅かしている。

それに対して日本の社会はどのように対応しようとしてきたのか。じつは今回問題にしたいのはそこである。上記のような危機的な諸現象への日本社会の対応に、わたしはむしろ病理の根深さ、深刻さを感じざるをえないのだ。

日本の社会で何かある異常な現象が起きたときの対応を考えてみよう。例えば駅のホームから携帯電話をにかけていた女性が線路に転落して電車にひかれ亡くなったとする。おそらくすぐに出てくるのは駅のホー

ムでの携帯使用の制限ないしは禁止だろう。かりにそこまでいなくても、ただでさえひっきりなしの案内放送で喧騒を極めるホームでさらに頻繁に携帯使用注意のアナウンスが流れることになるだろう。かつて林間学校や臨海学園は事故が起きやすいから廃止しろという父母の声に負けて小学校や中学校がいっせいに林間学校や臨海学園を廃止したことがあったが、これなども同様な傾向のあらわれである。日本の社会は、異常な現象が起きると「安全」を旗印に、危険性が予測される行動の禁止や制約・制限のための規則を作る、あるいは規則をより一層きめ細かく厳密なものしてゆくという発想に向かうのである。その結果どうなるだろうか。

まず第一に考えられるのは、行動の当事者であるひとりひとりの個人が自分自身で危険の有無や程度を判断し、それに基づいて行動するという能力の減退である。規則があらかじめ危険を判断してどう行動すべきかを決めてくれるのだから、個人個人は自分で考え判断する必要がなくなる。そして何かが起こるたびに規則をより厳格化しろという要求だけがエスカレートしてゆく。今日本では川や沼で泳ぐことは事実上全面禁止になっているが——わたしの子供の頃は当たり前のことだった——、もしこの禁止の論理を拡大してゆくと、海で泳ぐことも、プールで泳ぐことさえも危険だから禁止せよというところまで行き着くはずである。

ライブツイヒでこんな体験をした。ライブツイヒ中央駅の前には ترامやバスのターミナルがある。ホームが4つ並びひっきりなしに電車やバスが行き来する。ところで旧市街の側から駅に入ろうとすると、このターミナルの両端にある「踏み切り」を渡らねばならない。ターミナルをはさむ車道には信号があるが、ターミナル内の ترامの線路の部分は遮断機も信号もない。歩行者は自分で電車やバスが来ているかどうかを確認して渡るのだ。電車は短い合図だけで突然動き出す。ひやっとするような瞬間もある。わたし自身、来たばかりの頃は、なぜ規制を行わないのか不思議でならなかった。実際そこを渡るのに毎回冷や汗の出るような緊張を感じたものだった。だが慣れてくると、これでいいのかなと感じるようになってきた。たしかに危険な面はあるが、それよりも規制を設けることによって生じる様々不利益、つまり別な意味での「危険」について、ライブツイヒの市民はよく知っているのを感じたからだ。それは、自分で考え判断する力、権利が規制や規則によって侵害されることの危険性である。それは、人間から自律の根拠を奪い、規則の奴隷にしてしまう危険といってもよい。なぜそれは危険なのか。じつは規則の厳密化によって支えられる「安全」は、本当の意味で危険を判断する力を人間から奪い、人間を他律化、つまり奴隷化してしまうからである。そしてそうした他律化＝奴隷化は、じつは人間から個々人の自律にも

とづいて共生の実現の場としての社会を自発的に形成してゆく力を奪い取ってしまうのである。

今日本の社会に起こっている事態はこうした他律化＝奴隷化の帰結に他ならない。規則の厳密化の結果何が起こっているだろうか。規則の網の目の緻密化は、規則に従順にしたがう何も考えない・自分を持たない羊の群れを生む一方、逆説的に「規則に書かれていない」という理由だけからおよそ非常識・非人間的な蛮行を平気で行う人間を生み出す。たびたび駅のホームの話で恐縮だが、わたしがいちばん信じられないのはホームで幼児の手を離し携帯に夢中になったり談笑したりしている保護者たちの存在である。たしかにホームでは子供の手を離してはいけないという規則はないかもしれない。だが自分の頭で考えればそれがいかに危険なことか、極端に言えば子供に対する潜在的な「殺人」行為とさえいえる危険な行動であるということぐらいは分かるはずである。規則の厳密化による「安全」の確保という発想がこういう徒輩を生み出すのだ。パチンコに熱中して子供を死なせた親も同断である。だが個人の責任を追及してみても問題の解決にはならない。問題は規則の厳密化によって「安全」を図るという発想そのものの根本的な転換なのだ。

先ほど少し触れたように、問題なのは個々人の自律を土台にしながら自発的な共生の形成の場として社会を捉えることであ

る。日本の社会はちょうど逆になってしまっているのだ。あらかじめ「・・・はしてはならない」という禁止規則を上から、ないしは外側から個々人に押し付け、そうした禁止規則に個々人が従うことを「社会」（本当の社会ではないのでカッコをつける）の形成・確立だと考えるのが日本なのだ。そしてそうした禁止規則を作るのはたいてい政府であり、自治体であり、上に立つ管理者である。つまり「お上」である。こういう「社会」では、人間は徹底的に他律化され奴隷化される。問題なのは「奴隷は奴隷と気づかない限りにおいて奴隷である」というところにある。他律化され奴隷化された「社会」は、自分で考え判断する必要がないからある意味「快適」な社会である。全部「お上」の作る規則に判断を委ねてしまえばいいからである。だから他律化され奴隷化された個人は自分が奴隷であることに固執する。規則の一層の厳密化を望むことはこうした奴隷化願望のあらわれに他ならない。そして何より問題なのは規則が内在化されないから個々人には規則を守る必然性も内発性も存在しないことである。かつてフランスの社会学者E・デュルケームは大衆社会化とともにあらわれる規則からの逸脱現象を「アノミー」と呼んだが、この「アノミー」こそが規則の厳密化の結果起こる規則の空洞化、つまりは社会の不在化という逆説の根本的意味に他ならない。

前回のテーマに引きつけていけば、こうした病理は「野球型社会」の病理である。つまりあらかじめ規則や役割を決めてそれに従うことを「社会」だと考えるような野球型の発想の帰結なのである。先ほどのライブツイヒのターミナルは、それに対して「サッカー型社会」の現実を典型的なかたちで象徴している。もちろんこうした社会で生きてゆくのは楽ではない。コンビニのない、自動販売機のない、自動ドアも冷房もないライブツイヒの生活は日本に比べれば率直に言って不便極まりない。だがこの不便さは、自分の頭とからだを自律的に使って生活するためのコストなのだ。「サッカー型社会」はこうしたコストを要求する社会なのである。日本の社会はこうしたコストの負担を徹底的に排除してきた。便利さと効率と「安全」をひたすら求めていった。その結果日本の社会は今社会そのものの消滅の危機に瀕してしまっている。今日日本には「野球型社会」から「サッカー型社会」への根本的な転換が求められているのではないだろうか。

たまたま旅行でアムステルダムで行った日がオランダ・スペイン戦の決勝だった。町はオランダチームのユニフォームの色であるオレンジであふれかえり大変な熱気だった。ワールドカップの決勝に出られる国が心底うらやましかった。日本がそうなるのに何年かかるのだろうかと思った。「野球型社会」から「サッカー型社会」への転換抜きにはたぶん永遠に不可能だろうとも思った。

高橋順一